

「読書をしていなければ、今のわたしはない」

第5回読書マラソンコメント大賞金賞受賞作品

森絵都著『風に舞いあがるビニールシート』（文藝春秋）

2009年のコメント大賞金賞を受賞された堀内ゆうきさんは同志社大学の学生さんでした。名和（言文センター教授）は、今年は国民読書年でもあり、読書キャンペーンの意味もこめて、堀内さんにインタビューを申し込んだ。堀内さんはころよく引き受けてくれて、以下のようなインタビュー記事になった。読書好きの学生さんやコメント大賞を目指す学生さんに読んでいただければ幸いです。（中見出しは編集部）

堀内ゆうきさん（同志社大学 4年）（Hと略）

名和又介（同志社大学教授）（Nと略）

横山治生（京滋・奈良地域センター事務長）（Yと略）

■本が好きだった小・中・高時代

N このたびは読書マラソンのコメント大賞金賞受賞おめでとうございます。近畿地方で金賞を取られたのは初めてだそうで、同志社大学としても喜ばしいことです。

H 2回生の頃、京田辺の生協書籍部で読書マラソンのことを知って、応募をしました。コメント大賞では、最初はカードで文章だけ書いて提出するのですが、受賞のお知らせとともに「清書してください」と依頼をいただいて、イラストも入れて書いたのが新聞で紹介されました。

N それが朝日新聞に出たんですね。子どもの時から読書好きでしたか。本好きの少女だったのかしら。ご出身はどちらですか？

H 子どもの頃から本は好きでした。実家は福井市内です。

N いいところですね。小学校、中学校、高校と福井で過ごされたんですね。本との出会いとか、小さい時に読んだ本の思い出など、なにかエピソードがあれば。

H 弟がいますが、母が言うには、小さい時から読み聞かせをしていて、弟よりも私のほうが静かによく聞いていたそうです。昔から本は好きだったようで、保育園の先生が私だけに特別に本をくれたことがありました。小学校低学年の時は『長くつ下のピッピ』という童話がすごく好きでした。いろんな翻訳版を集め、映画も観ました。

N 『風に舞いあがるビニールシート』の著者の森絵都さんも、もともと童話文学の人ですね。児童文学にも興味がありましたか。

H 中高のとき、森さんの作品を読んでいた友人がいました。高校入試の過去問題にも出ていました。私は、周りが読んでいるとかえって反発して、読みませんでした。

N ところで、同志社大学の文学部美学芸術学科を選ばれた理由は何でしょうか。

H 受験勉強をしていたときから、文学部に行こうと思っていました。実は、小・中学校



と演劇部に入っていて、大学では舞台に立つよりも、演劇を研究したくて、演劇学科がある早稲田大学へ行きたかったんです。同志社の入学案内には美学芸術学科に演劇のことも書いてあって志願しました。でも入学したら、演劇ご専門の先生はいらっしゃらなくて。芸術全般に興味があったので学科の勉強も楽しかったですが、演劇は趣味で観に行ったり、演劇ワークショップを実施する活動に参加したりしていました。副専攻で近現代国文学も学んでいました。

N 大学時代、本はどれくらい読みました？ 大学生協の読書マラソンは「在学中の4年間に100冊読もう」をスローガンにしていますね。

H 結構読んでいます。100冊読もうというエントリーには参加していませんが、でも100冊以上は読んでいます。心に残った本に巡り合ったときは、なにか記録を残しておきたいとノートをとっています。

N 僕は30代過ぎてから、読後感想を書くようにしてきました。1年の終わりに、それを繰って、これ、面白かったなあとか、つまらなかったなあと振り返るようにしています。どうも、歳をとってくるとそうしたいと思うようになったんですね。今回の「風に舞いあがるビニールシート」は、久しぶりに面白い本でした。著者は相当、力量のある作家ですね。女性の気持ちや、心の中のひだを見事に描いているのには感心しました。『風に舞いあがる〜』は短編の一部ですね。堀内さんのコメントもなかなかの名文だし、素直に、ストレートに伝わってきますね。こういうまっすぐなところが評価されたと選考委員の人も言っています。

H よく“人の命は地球より重い”と言いますが、本当にそうかなあ、どうなんだろう、違和感があるなあと思っていた時に、藤原正彦さんの本に「人の命が重いのは嘘だ」と、命は弱くて、ちっぽけで、軽い存在だからこそ大事にしなければいけない、というようなことが書いてあって、それがずっと頭にありました。『風に舞いあがる〜』も、この表題作のタイトルが命の比喻になっているところに感銘を受けて、それが心に残っていた言葉とぴったり一致したんです。とても印象的でした。

主人公の女性・里佳とエドは、国際連合難民高等弁務官事務所(UNHCR)で仕事をしていますが、エドはフィールド職員で現場を飛びまわって難民を守ることを生きがいにしていて、里佳は東京で仕事をし、自分の生活や家庭を大事にしようとする。対極的な生き方をしながら、惹かれあう。でもエドの死をきっかけに主人公は自分の殻を打ち破って、エドの生き方を歩んでいくという話です。私は、どちらかといえば里佳の方に共感しました。テレビニュースなどで、開発途上国の子どもたちが戦争で苦しんでいたり、働かざるをえなかったりする状況を知ると、何とかしなければという気持ちは起きますが、現地には行けないなという甘さが自分の中にあると思います。

ほかに「守護神」という短編が面白かったです。社会人学生の男性が仕事をしながら大学で単位をとるのが難しくなって、社会人学生のためにレポート代筆をしてくれるという「守護神」といわれる女性に頼むんだけど、断られる話です。「守護神」と話すうちに、主人公は、本当は文学青年である自分を抑えてきたことにやがて気がついて、寝る時間を惜しんでも自分でレポートを書こうとするという。

N 短編のだいたいご味を感じる作品でしたね。話の中に出てくる徒然草の分析もすごいなあと思いました。ほかにコメントを書きたい作家はいますか。





H 実は去年も読書マラソンにチャレンジして、その時は谷川俊太郎さんの詩集について書きました。谷川俊太郎の作品には、愛があふれていて昔から好きです。ふつうは愛なんていうと恥ずかしいのですが、谷川さんの詩では不思議と恥ずかしくなく、愛があふれている、という言い方がぴったりだと思いました。

最近、樋口一葉がすごいなあと思っています。代表作の『たけくらべ』『にぎりえ』『大つごもり』『十三夜』しか読んでいませんが、現代の感

覚で読もうとすると難しいけれど、じっくり時間をとって読みふけりたい作家だと思います。

N 樋口一葉は本郷に住んでいたことがありますね。僕は司馬遼太郎が『街道をゆく』シリーズの『本郷界限』という本の中で、このあたりに森鷗外や夏目漱石が住んでいて、なんて話を読んで興味が湧いてきて訪ねてみたことがあるんです。京都という土地柄はどうですか。

H 国文の授業で谷崎潤一郎を取り上げて、みんなで糺の森や下鴨かいわいを歩いたことがあります。谷崎潤一郎の邸宅も訪問して、一般の観光客は行けないような場所でした。邸宅のいたるところに、ここで作品を書いた、ここが作品の舞台になったという説明があって面白かったです。

■今の自分と読書が結びついている

N いまは、年々、本を読む人が少なくなっています。大学生協の読書マラソンも読書離れが顕著になってきて始まりました。堀内さん自身、読書というものをどういうふうに考えていますか。僕は教師という職業柄、本を読め、読めと、読むことの大切さを強調しているんですが、あなたのような若い人が同世代に向けて言うのでしょうか。

H 「本読むのが好き」というと、周りから「すごいね」と言われますね。娯楽として読んでいる分には、テレビゲームやサッカーが好きで毎日やっていることと変わらないと思うんです。読みたくなければ読まなくても生きていける。でも、私の場合、本を読んでこなかったらここまで生きてきたのかどうか。大げさかもしれないけれど、読んでいなかったらやってこられなかったのではないかと思います。少なくとも今の私はなかったかもしれないと思います。

N 今の自分というものと読書が結びついているんですね。スポーツでもいいのかもしれないけれど、やはり読書って、根本的なところで大きな意味を持っていますね、特に若い時代の読書は。具体的にいうと『二十歳の原点』とか中原中也、太宰治などは毎年取り上げられる本ですけど、やはり若い時でないといけない感動というものがあるんですね。

H 子どものころは何を読んでも感動したような気がします。今は読んでも覚えていない作品があつて。年齢によっても読み方が変わる本もありますし、昔読んだときには分からなくて、今読むと良さが分かる本や、逆に、今読むと浅いなと思う本もあります。

N 堀内さんは、同志社大学の美芸専攻ですね。美芸は全国的に珍しい学科で、西日本ではトップレベルの“鉄人たち”ぞろいの、ユニークな学部ですね。もともと演劇志望と聞きましたが。

H そのあたりの事情を知らずに入学しました。高校時代は、早稲田の演劇科を目指していました。早稲田は村上春樹さんや俵万智さんが出ていて、俵さんは高校の演劇部の先輩

にあたり親近感を持っていたんです。小川洋子さんも早稲田だし。今は、大学生活を過ごすには、京都で、同志社という場所で本当に良かったと思っていますが。早稲田の演劇博物館へは行ってみたいです。

■将来も本に関わって

Y ほかに印象に残っている作品は？

H 灰谷健次郎さんの『兎の眼』。父が好きで、読まされました。父には壺井栄さんの『二十四の瞳』も薦められて読みました。

N 僕も灰谷健次郎は好きだなあ。淡路島に住んだり生き様もすごいですね。

H 父は今、藤沢周平さんの小説を読んでいるようです。

Y 私は文学少女だった姉から小野十三郎らの現代詩を読むよう、影響を受けました。

お母さんはどうですか？

H 母はよく本を買ってくれました。母が好きな『赤毛のアン』も読みました。

N 映画はどうですか？

H よく DVD を借りてきて観ます。『かもめ食堂』とかが好きです。高校の時に読んだ小川洋子さんの『博士の愛した数式』は、本も映画も好きでした。

N やさしさが際立ったお話でしたね。堀内さんはコメントだけでなく、自分でも（小説を）書いてみたいとは思いませんか。

H 中学、高校の時に、地元の賞をもらったことがあります。福井新聞社の主催で、ふくいジュニア文学賞を設けていて、中3の時に、総合学習の時間に書いた作品を、先生が「出してみたら」と薦めてくれました。高校1年で大賞をもらいました。

N 今回のコメント大賞受賞もまさに実力ですね。『風に舞いあがるビニールシート』は、学生さんが選ぶには玄人っぽい選択だと思いました。若い人が面白かった、すぐに書こうという本ではない。お話を聞いて、やはり実績のある人の書き方だなと思いました。福井新聞社の賞をもらった作品はどんな内容ですか？

H 自分の体験をふまえた内容で、自分と同じ年頃の女の子が主人公で、高校へ入学して、かつていじめが原因で転校した中学校時代の友人と再会するという話です。主人公には、その友人をかばってあげられなかったという後悔があって、複雑な気持ちでの再会になってしまう。選考委員の評価を聞くと、「いじめ」とか「転校」といった問題は多くの応募作品に取り上げられていて、中学生高校生の共通の関心事だということでした。

N 樋口一葉みたいだね。モノを書くということでは、エリートの道を歩んでこられたんですね。将来、司書を目指しているということですが、どんなお仕事を目指していますか？

H 今、応募しているところは嘱託職員なので、さらに将来のことも考えながらまだまだがんばらないと、と思っています。本にかかわる仕事をしながら、小説も書いていきたいと思っています。

